

## アカデミック競馬エッセーの目指すところ

石川 肇

受賞の連絡を受けたのは、日本中央競馬会（JRA）の重賞レース「七夕賞」を待ち遠しく思っていた七月初旬のことだった。

「はじめまして、わたくし『週刊Gallop』の編集長で鈴木と申します。ギャロップエッセー大賞に石川さんの作品が選ばれましたので、そのご報告です。おめでとうございます」

『週刊Gallop』は競馬専門誌で、年に一度、競馬をテーマにした「エッセー大賞」の募集がある。競馬をこよなく愛するわたしは、友人の勧めもあってそれに応募していた。第一回となる今回は一六九編の応募作があり、一次予選で一六編に絞られてのちの最終選考だった。審査員は吉川良（作家）・高橋源一郎（作家）・吉永みち子（作家）・北上次郎（文芸評論家）・井崎脩五郎（競馬評論家）ら競馬玄人の五人で、受賞作発表時には次のような選考過程が載っていた。〈選考委員各氏の最も高く評価する作品が、まったく重ならないという異例の事態。議論も平行線をたどったため、過半数が受賞候補として挙げ、なおかつ1人以上は上位3番目以内に評価していた5作品に絞って、各氏その中から最上位を選び直すことになった。その結果、過半数の3人が票を投じた『舟橋聖一の愛馬命名と女たち』の大賞選出が決定〉

つまり五人のうち三人がわたしの、そして二人がHさんの『旅打ち』に投じたので、まさに「鼻差」の受賞だった。しかしながら鼻差でも大賞には違いない（と、強がってみる）。また、

和尚という名をもつ中学時代のサッカー部の監督が「接戦の末の勝利こそ大事。大差の勝利より尊い」と語っていたのを思い出した。「俺は寺の息子だ」と言い張る彼の言葉はなんとなく胡散臭かったが、三〇年近く経った今も、わたしを励ましてくれるから面白い。

「石川さんは競走馬を所有している作家のエピソードをお書きになりましたが、そうした馬主文士を中心としたエッセーを、もっとお書きになるつもりはございませんか」

「え？」

「一〇月から連載をお願いしたいのですが、いかがでしょうか」

「本当ですか?!分量はどのくらいですか」

「原稿用紙にして六枚から七枚、雑誌の見開き分となります」

あまりにも突然のオファーで驚いたが、すぐに引き受けた。競馬専門誌における月刊誌の代表がJRAの『優駿』とすれば、週刊誌は産経新聞社のこの雑誌で、競馬ファンとしてこれほど名誉なことはないからだ。

「馬が合う」という言葉はもともと乗馬用語で、馬と乗り手の呼吸がぴったり合っていることを指すが、鈴木さんはわたしにそれを感じてオファーをかけてくれたそうだ（本当にありがたい）。そして、そんな乗馬用語をさり気なく交えてくるあたりが彼のセンスで、連載に「アカデミック競馬エッセー」と見出しをつけてくれた。そして肝心のタイトルは悩みに悩んで『馬の文化手帖』としたが、これは日中比較文化研究で著名な劉建輝先生のアドバイスによる。それにエッセーごとの小タイトルを毎回つけて送り出しているが、編集部が掲載時に付した概要とともに、それを記しておこう。

◇『馬の文化手帖』二〇一五年度

## 第一回「競馬場外物語」

昭和の花形作家である舟橋聖一は日本の競馬小説の先駆者と目され、昭和二八年の秋の中山大障害を勝つモモタロウの馬主としても知られる。今回は、舟橋が競馬を通じて親しくなった文豪・菊池寛と織りなした衝撃の「競馬場外」エピソードをお送りする。

## 第二回「馬の応援とご先祖様」

トキノミノルを「幻の馬」と称した作家・吉屋信子は馬主文士として知られ、足しげく競馬場へ通っていた。今回は舟橋聖一の目白御殿で一人娘美香子にお話しした吉屋と舟橋にまつわるエピソードをお送りする。

## 第三回「彼女に学ぶ競馬の歴史」

文士・舟橋聖一が著した競馬小説『遠い花』は、昭和二二年九月から翌二三年一二月に掲載された。今回はその主人公である満千子の言動から戦中戦後における競馬の変化の一端を読み解く。

## 第四回「馬産物語の誕生」

舟橋聖一が初めて手掛けた競馬小説『躍動』からは舟橋の競馬、馬産に対する考えが垣間見える。今回は舟橋聖一記念文庫におけるエピソードとともにこの名高い「馬産物語」の概要を紹介する。

## 第五回「大連競馬ミステリー」

昭和五年、『新青年』に掲載された『競馬会前夜』は大庭武年による日本初の競馬ミステリーである。大庭はなぜ競馬を題材にした探偵小説を、しかも当時のモダン都市・大連を舞台に描いたのだろうか。

## 第六回「スガタ牧場に見た夢」

柔道小説『姿三四郎』などで知られる作家・富田常雄は、のちに自らの牧場を開設するほど熱心な馬主文士だった。今回は筆者自身の競馬に関する青春時代のエピソードとともに富田が牧場を持つほどに懸けた競馬への愛情を読み解いていく。

## 第七回「当て馬」

舟橋の競馬体験をつづった日記にも登場する作家・片岡鉄兵はへ鉄兵さんに会うなら競馬場」というほどの競馬好きだった。今回は片岡の代表作である『朱と緑』の一節から、今昔を問わぬ競馬と「男女の駆け引き」の相関に思いを巡らせる。

## 第八回「ユーモアに添い寝して」

舟橋とも親しかった人気作家・北杜夫の晩年の作品、『マンボウ 最後の大バクチ』の中に、競馬に関する記述がある。今回は、娘・由香とともに上山競馬場へ訪れた際のエッセーから文中に秘められた北から娘への感謝の気持ちを読み解く。

## 第九回「芸術は爆発だ」

岡本太郎は競馬に関するエッセーを残しており、その中に、競馬馬を擬人化した挿絵がある。岡本が人生で初めて描いたというその「漫画」は代表作・太陽の塔にも通ずる印象的な作品である。

## 第一〇回「ユリシーズの写真」

今年二〇一五年は文学や演劇そして競馬評論と幅広く活躍した、寺山修司の生誕八〇周年にあたる。寺山が「自分似たもの」と思い入れた愛馬ユリシーズは、まるで劇の脚本のようなきっかけから所有した競走馬だった。

## 第一一回「馬と妖怪」

「バカ」は今も昔もあまりいい意味では使われない言葉だが、馬鹿とかいて「ウマシカ」と読ませる妖怪がおり、先日亡くなった漫画家の水木しげるも描いていたという。そこで今回は、妖怪と馬の縁について話を広げてみたい。

### 第一二回「Shall we ダンス？」

二〇年ほど前に映画の影響で大ブームが起きた社交ダンスは昭和の文士たちも同様に楽しみ、作中にもよく登場した。

今回は作者自身の〈苦しい〉経験談を交え、ダンスと切り離せない恋のエピソードを紹介する。

第一三回「火花とびちる競馬かな」

歴史小説『敦煌』でも知られる芥川賞作家の井上靖に、その名も『鮎と競馬』という競馬がテーマの短編がある。その作中、抑制の効いた文中にちりばめた〈火花〉こそ「文壇きって



「ウマシカ」北斎季親作『化物尽絵巻』  
(国際日本文化研究センター所蔵)

の紳士」井上の、小説作法と言えまいか。

連載は二〇一六年三月までの半年間、全二四回を予定しているが、それだけ続けると単行本一冊の分量になるそうだ。

「二四回続けて本にして馬事文化賞を狙いましょう」

「宮本輝の『優勝』が第一回目に受賞した、あれですか？」

「そうです、JRAの文化賞です」

「それはさすがに難しいですよ」

「いえいえ、文化・文学からの競馬エッセーなんてないですし、馬事資料としても貴重なものとなるのでいますよ！」

わたしはこのおだてに乗ったわけだが（わかっていても面白そうだった）、賞に関することとはともかく、エッセーの狙いが〈文化・文学からの〉にあったことは確かだ。それはさきに記した概要からもわかってもらえるだろう。馬や騎手そしてレースを中心とした競馬エッセーならわたしよりも適任者がいるし、日本文化・文学研究という視点から切り込むことで、「競馬文化の多様性」を表現したいと考えたのである。これが〈アカデミック競馬エッセー〉の目指すところである。

（国際日本文化研究センター機関研究員）